

日本語のアカデミック・ライティングに規範は必要ないか：
「構成」面の分析に基づく提案

ARE STANDARDS FOR JAPANESE ACADEMIC WRITING NECESSARY?:
PROPOSALS BASED FROM ANALYSIS ON ESSEAY ORGANIZATION

田中真理, 名古屋外国語大学
久保田佐由利, イースタン・ミシガン大学
Mari Tanaka, Nagoya University of Foreign Studies
Sayuri Kubota, Eastern Michigan University

1. はじめに

本研究¹は日本語のアカデミック・ライティングにおける good writing 研究の一環で、第 1 言語 (L1) と第 2 言語 (L2) の小論文 (essay) の相互考察によって、効果的なライティング教育を検討することが最終目標である。本稿では、英語のアカデミック・ライティング (例えば, Bailey & Powell, 2008 ; Reid, 2000 ; 門田他, 2006 ; 上村・大井, 2004 等) において規範とされている下記の (1) ~ (3) を, 日本語ライティングにおいても「(マクロ) 構成」の「規範」として積極的に取り入れてはどうかという提案を行う。

- (1) パラグラフ概念：1つのパラグラフ (形式段落) には1つのアイディアを述べる。また, パラグラフは1文から成ることはない。
- (2) 3部構成：序論・本論・結論から成り, それにはバランスが必要である。
- (3) 序論と結論の呼応：結論には序論で述べたことを言い換えて, 呼応させる。

1.1 アカデミック・ライティングと小論文

アカデミック・ライティングは, 文章を大きく「説明的文章」と「文学的文章」に分類した際, 前者に属するもので, 本稿では, 特に説明・論証をレトリカルモードとする大学で書く文章と定義する。ここではその中の小論文のマクロ構成について分析, 検討する。

小論文は, 一般的には「意見文」等の論理的な文章で, 大規模試験や入学試験, 採用試験等のハイステークステストで用いられ, 時間制限, 字数制限のもとで書かれることが多い。実際の大学生活で小論文を書く機会はあまりないと思われるが, アカデミック・ライティングの基本を習得するのに有効だと考えられる。

マクロ構成の変遷を見ると, 日本人学生が書く英語小論文は, 1980年代には主張が最後にくる帰納型 (尾括型) であったが (Fathman & Kobayashi, 1984; Oi, 1986), その後, 主張が最初にくる演繹型 (頭括型) になってきた (Hirose, 2003) と指摘されている。一方, 日本語小論文も, 英語ライティング教育や初年次教育の一環としてのアカデミック・ライティング教育の影響もあり, 主張が最

¹ 本研究は科学研究費基盤研究 (C) 22520542 「日本語の good writing : 第 2 言語と第 1 言語による比較」 (田中真理代表) の助成を受けた。また, 基盤研究 (B) 26284074 「日本語ライティング評価の支援ツール開発: 「人間」と「機械」による評価の統合的活用」 (田中真理代表) の研究の一部である。

